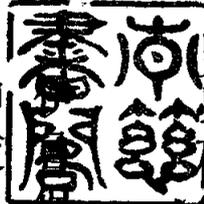


明治四十五年四月

史學
研究會
講演集
第四冊

東京
合資
會社
富山房發行

史學研究會講演集第四冊



目次

保物語考

文學博士 上田

田

敏

一頁

印度史研究資料に就いて

文學博士 松本文三郎 九三

元祿時代の京都市小説家

文學士 藤井乙男 一五四

儒佛道三教葛藤史研究資料

文學博士 高瀬武次郎 一九二

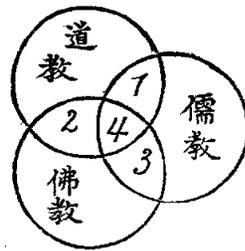
鎌倉時代の布教と當時の交通

文學博士 原勝郎 二九九

儒佛道三教葛藤史研究資料

高瀬 武次郎

私の演題は儒佛道三教葛藤史研究資料と云ふ非常に長い演題でありまして、此題の意味を考へましても頗る複雑である、葛藤と言つても三教の葛藤に限らず、或は二教互に葛藤して居る所もあります、それで略圖を以て三教葛藤の有様を表はします。



(1)の如く道と儒との關係もあり、(2)の如く道と佛、(3)の如く儒と佛、(4)の如く儒佛道の三教の關係もあつて、斯の四種の關係ある上に、又順即ち融和的と、逆即ち諍論的とで詰り八種の關係になる、詳しく言へば儒道の關係にしても儒道互に融和一致して行ける時と互に争つて居たとありますから、總體では随分複雑なものになる、以上の内容を綜て含めて三教葛藤

史と名づけたのであるから、左様御承知の上で御聽を願ひます。

それで支那哲學史、佛教發達史或は道教發達史は勿論別々に研究さるべきものである、前二者は幾分か研究して世に出されたものもあるが、それとてまだ十分完全なものとは出でありません、特に道教史に就て日本人或は支那人に依つて書かれたものは全く見ませぬ、殊に三教交渉せる所の史蹟即ち今示した圖解の第四に當る點に就ての研究はまだ出來て居ない、併し道教に就ても此頃は幾分か斷片的に研究する人が出來て來たから遠からず立派な發達史も出るであらうと待て居ります、私は平常三教相互關係が如何であるかを知りたいと思つて幾分か材料を集めつゝあるが、まだ十分に集まらな

い、此處に持參したものが自分の手に入つた部分であります。次に三教と云ふ名稱に就て考ふるに、日本に於ては道教が傳はつて居ないから神儒佛三教の意味と合點されるが、併し今日は全く儒佛道三教葛藤の歴史に關する材料を紹介するのであります。

先づ簡單に三教の起原を述べますと、儒教の起原は伏羲頃から段々堯舜文王武王周公を経て孔子に至つて其基礎が確立されたことは極めて明白である、然るに道教の方は儒教の如く明白に其淵源を捜すことは出来ないが、先づ一般の說に従うて黃帝を祖として、それから其思潮が流れ來り、老子に至つて世の中に五千數百言の一大文字となつて著はれた、其老子も初は哲學であつて、道教と云ふ宗教が成立したのは餘程後

即ち後漢以後のやうに思はれるのである、然れば老莊哲學の方と宗教として成立せる道教の方とは之を混同して論ずることは出来ないのであるが、後漢以後になると道教と云ふ名で矢張り老子を祖として居るのであるから、今は成立後の慣例に従うて老子を祖と見て差支なからうと思ふ、佛教は印度に起つたものであるが、支那に傳はつたのは後漢の明帝の永平十年に西域から傳はつて來たと云ふことが一般に信ぜられて居る、それ以前は周の穆王或は秦の穆公又は秦の始皇又は前漢の武帝の頃と云ひ色々な説もあるけれども、十分誰人も成程と云うて信ずるのは先づ後漢の明帝の永平十年である、私が此の處で述べますのも三教が揃つてから後の葛藤であるから、大體後漢頃からの話になります、後漢頃から考究

を始めても三教の優劣が時代に因つて色々變つて居る、さて、儒教と道教とは元來支那で起つたものであるから根柢が早くから出來てあつた、特に儒教の根柢は非常に鞏固であつた、佛教の方は後漢の末葉になりては段々擴がつて居るやうであるけれども、六朝の初頃までは何分微々たるものであつたが、六朝の間に非常な勢を以て世の中に傳播した、六朝の末葉になると三教は殆ど鼎立の有様になつた、唐の頃に至つては、既に三教は何れを第一位に置くかと云ふ問題が隨分喧しかつた、其故は唐代には唐の天子李氏と李耳てふ老子の姓とが同姓である所から老子は我が始祖なりと主張した結果、道教が非常に重んぜられて、頓に勢力を増加し、遂に道教が第一位で儒教が第二位、それから佛教が第三位と云ふ次第に大抵順

番を付けられた、全體に就て見るに儒教は秦の暴舉以外は佛
教及道教の盛衰の如く著しい盛衰はなかつた、昔から近來に
至るまで始終勢力を持続したのである、是は色々の原因があ
るが、他の二つは宗教にして、儒教は宗教でなく、一般士君子の
必ず修むべきものであるから、餘り俄かに宗教の如く尊崇さ
れることの無いと同時に全滅さるゝこともなかつたのであ
る。

又三教の傳はる中には三教一致論者も起るし、二教一致論
者も起つたのである、其一致を唱へる人は全體から言ふと考
は極く淺薄にして一致した點のみを擧て世の中に立つて教
化を施さうと云ふ主義であるから、孰れにも別に憎まれるこ
ともなく至つて調和的に進み行き、思想を紹介する上に於て

は廣く影響があつたやうに見える。

さて一の哲學史を研究する時に當て唯其一つばかりを研究して居つては、どうも十分に了解の出来ない場合がある、例へば儒教哲學を調べたいと思つても、儒教の本ばかり讀んで居つては、どうも分らぬことがあるが、佛教者の書いたものを讀むと何の苦もなく了解されることがある、然れば矢張り三教葛藤史の如き性質のものを研究する上に於て得る所の利益は少なくないのである。

試に一例を挙げますと宋の周濂溪が平常少しも窓前の草を削除しなかつた、或人之を問へば曰ふ我意思と一般なりと云ふ話があつて、私は其所を始終讀んでも充分に分らずに居つた所が、居士分燈錄の中には唐宋頃の儒者が參禪したこと

を書いてあつて、此話も出てある、其を讀むと、佛印禪師、周濂溪を相與もに道を講ず、濂溪問て曰く天命之を性と謂ふ、性に率ふ之を道と謂ふ、禪門何ぞ無心是れ道と謂ふ、佛印曰く疑へば則ち別に參せよ、濂溪曰く參すれば則ち無ならず、畢竟何を以てか道と爲すと、佛印曰く「滿目青山一に看に任す」と、濂溪豁然省あり、一日忽ち窓前草生ずるを見る、乃ち曰く、自家意思と一般と、偈を以て佛印に呈して曰く、昔本不迷今不悟、心融境會豁幽潛、草深牕外松當道、盡日令人看不厭」とある、然れば斯かる意味であるかと云ふことが能く分る。

又道教と佛教との交渉の歴史を考究して居りますと、老子化胡經と云ふ本がある、此經は老子の周を去つて後西域の方へ行つて胡人を教化したと云ふことが書いてあるのである、

其著の要旨は老子が釋迦の師であるとの意見を主張し、詰り佛教を自分の味方に取込うと云ふ考を示したものであるが、之に對して佛教徒は老子及孔子は即ち佛教の菩薩の化身であるとして主張して居る、其等の事を参考すると、我邦の傳教弘法等の本地垂跡の説も遠く其淵源があることが能く分るのである、此の如く他の方を研究するに因つて種々な益を得ることがある、一方を讀んで居つては其人の新發明であるが如く見えるものも、彼方を廣く參照して調べると、さうでないことが分るのみならず一層其處の意味が明白になるものである、然れば三教相互交渉したことを研究するに因て色々な利益が得らるゝと思ふ。

次に三教の全體の傾向を見ますと、道教の徒は儒教の徒と

佛教の徒とに挾まれて居る、元來思想から考へても道教は儒教にも附かず佛教にも附かぬ中間の地位に立つて居る、或は其道教が幾分か佛教の方に接近したいと云ふやうな傾向が見えることもあるが、佛教の徒は自分の方から道教の歡心を買はうと云ふことはない、道教の立場は幾分か苦しいやうな傾が見える、其の苦心の結果、道教の徒が老子化胡經の如きものを拵へて佛教の方に融和結合して自分の味方に引入れたいと云ふ傾向が見えてある、併し他の見解の附かぬ事もない。

又佛教徒は儒教の方に接近しやうとした傾向が見える、其故は儒教は支那の土着の教でもあるし、又た總て士君子及官吏たる者の一般に修むべき必須の學問であるから全體に於て勢力が強い故に儒教を攻撃するよりは寧ろ道教を攻撃し

て居る、猶ほ其理由に關しては佛と道との二教は宗教であり、儒教は宗教ではないと云ふ點もあるし、まだ色々他に原因もあるやうですが、兎に角儒教は何時も泰然として居り得る地位に立つてある、且つ儒と佛と道との三教を論ずる場合には何時でも道と儒は支那の本土に發生したものであると云ふことで其徒も何だか心強く思ふし、又世間一般からも何だか親しく感ぜられて幾らか信奉と近親との念が深い、佛教は他國から傳來した教であるから、どうも何だか根據がないやうな氣がして、疎外され或は御客扱にされて居る、そして其心持が色々な争の場合に言ひ出されてあつたやうであります。

上來述べた所は大體のことでありますが、私の今日主眼とする所は三教争論研究資料を紹介するのであります、扱一番

古い所は列子の書中に西方に聖者あり治めずして治まる云云と謂うてあり、其事を孔子の語として記してある、此語は後世佛教者が曲解して孔子は佛を以て理想的の師として居ると云ふものである故に一言して置きます。

それから葛藤史の一番始と云ふのは後漢の明帝の永平十四年正月元日に事件の端緒を開いたのである、それは其時の五嶽十八山の道士共が朝廷へ年始の拜賀に出て拜賀式の後に色々合議して、今上陛下が異國傳來の胡教を信じ給ふは奇怪なることにて大に我が不利であると云ふことから遂に佛教と道教との宗論を奏請して佛教を排滅しやうと云ふことに相談が一決して天子へ奏請して許可を得て愈々白馬寺に於て一大宗論が起り、遂に道教徒の敗北に歸し多くの道士

が皆出家して佛に歸依したと云ふ事である、此記事は集古今
 佛道論衡の中に漢法本内傳を引いて述べてある、是は名高い
 話であるから諸君も御存知でありませうが此記事は餘り誇
 張に過ぎてあるから、誰も其眞僞を疑うて居るのである、佛敎
 が明帝の永平十年に支那へ迎へられて來て、それから僅四年
 經つた時でありますから、假令敕命を以て迎へた宗教にして
 も、さう頓に勢力を得ると云ふ事も如何と思はれるのみなら
 ず、道教が後漢の明帝の時に宗教として盛大なりしか又た幾
 百人と云ふ著名な道士が宗論の場に臨んで來ると云ふ程ま
 でに道教の勢力があつたかは頗る疑問である、假りに稍完全
 なる道教の組織を成してあつたとすれば、其時新たに佛敎が
 傳はれば多分多少の争はありしならんも、此記事の如き激烈

な宗論があつたかは疑はざるを得ない、漢法本内傳は著者が何人なるか又何時頃の著作かも明白でない、併し六朝頃の作であらうと云ふことは否定すべからざることである、且つ其記事が佛教者の手になつて居るやうであり、佛教の利益になるやうに道士が大敗したことを仰々しく書いてある、次に牟子と云ふ書物がある、詳しくは、牟子理惑論と云ふ、三十七ヶ條の問答を設けて儒教と道教と佛教との優劣を論じたれば比較論と云ふ名ではないが、暗にさうなつて居る、さうして佛教の最優と云ふことに決論してある、牟子と云ふ人は、どんな人か分らぬが普通の書物には後漢の太尉牟融撰としてあれども全く誤にて牟融の作にあらざることとは明白である、兎に角牟と云ふ姓の人にして桓帝靈帝頃の儒者であつたが後ち佛

教に歸依した時に世間から色々非難があつたから此書を著して、それに對する辯解を試みたので、其意は序文にも見えてあります。

其主意に自分は佛教を喜ぶけれども、決して文武周孔の教に背くやうな者でないと言ふことを示し、三十七ヶ條の問答を設けて、詰り道教よりも儒教よりも佛教が勝れて居るから佛に歸すると云ふのである、此書の大體が我邦の弘法大師の三教指歸と趣を同じくして居る、三教指歸も儒教道教佛教を論じて、佛教が一番勝れて居ると云ふことに論結してある、弘法大師の年代は唐の頃であるから、牟子の方が遙に古いのである、牟子の單行和刻本は、芝の増上寺の藏版のがあるが、世間でも極少ない、普通は弘明集の中に收めてあるので見ます。

其次に三國時代の吳の孫權が熱心なる佛教保護者であつた、そうして其臣下に儒、佛、道三教の優劣を問はれたことがありますが、其臣が佛教の最優なることを答へたれば益々佛教を信仰されたのである、此事は佛教流布の初期でもあり重大な關係があつて、其問答は自ら三論優劣の論となつて居ります。其次に魏の陳思王と云ふ人がある、此人は初は儒教の人でありましたが、後に深く佛教に歸依して、道教を攻撃し辨道論と云ふものを著はして居ります。

次に晉の阮瞻の無鬼論と云ふのがある、無鬼論は鬼神はないと云ふ議論である、此無鬼論に就て無鬼論辨と云ふ著書があるが、極めて俗本である、著者は我邦大阪の山片子蘭と云ふ人で妄に鬼神を信ずべからずと云ふ趣意を述べてある、之は日

本文庫の第十二篇に收めてあります。

晋の孫盛が老子は大賢にあらずと云ふ議論を立て又た老子と云ふ書物の疑ふべき點を擧げて色々詰つてある、此の人は儒者にして老子を攻撃した人である。

次に抱朴子と云ふのがある是は人の號でもあるし又同時に書物の名である、抱朴子は即ち葛洪である、洪は熱心なる道教信者で、道教と儒教との一致を唱へた人である、道教は内、儒教は外とし、内篇外篇とに分ち、内篇は二十卷、外篇五十二卷にて詳しく道教の事を説いてある、道教發達史上で道教を集大成した書物としては抱朴子を第一に推すべきものであらう、一讀して得る所の多き書物である。

晋の孫綽と云ふ人が論道論を書いて、儒教、佛教一致を唱へ

てある、其論は孫廷尉集の中に收めてある、時代から言ふと此次に老子化胡經のことを述べるべきであるが、それは雜誌藝文の第一卷第九號に桑原博士が詳論してあるから今は略しますが、それは最初、晋の王浮が老子化胡經を作つて、老子が佛の師たることを主張したのであるけれども其經も其後色々變遷を経て居る、之を難ずる者の中には其の老子化胡と言ふても老子が胡を化せんとして化することが出來ないので、其弟子の關尹子を佛にして化したと云ふやうなこともあれば老子化胡と云ふことが成立たないではないかとの説を立てた人もある、併し老子の弟子をして佛になつて化せしめたのであるから、つまり老子が化したと云ふことになるとも謂へるが老子が胡を化したと云ふことは勿論とは信ぜられぬの

でありませんが、史記の老子の傳には老子が西に向ひ關を出て其の終る所を知らずと云ふことが書てある、其所からでも老子化胡と云ふ説は捏造されるし後漢の襄楷傳を見ると其頃既に老子が胡に入つて佛を化したと云ふ流説があつたらしい、其等の傳説から議論が生じ遂に王浮をして、老子化胡經を作らしむるやうになつたのである、此後は道教と佛教との論争の種々の問題のある中にも化胡及變化佛の二事は頗る囂々たるものとなつて居るのであります、佛教者の方は老子化胡説を打消す爲に釋迦の年代は老子の年代よりも前きであるとの説を立つれば老子が佛の師なりとの説は消滅するから佛教者は釋迦は老子よりも約四百年前に生れて居ると云ふ説を案出した、假令其事が史蹟でなくとも、さう云ふ説を案

出して自分の教への勢力を張り敵を屈服せしむることは傳
教上矢張り其人の發明であり又功績であらうと思ひます、日
本の本地垂跡説も維新以來は全廢せられたけれども千有餘
年の間兎に角我宗教界には非常な勢力を有した、他國から傳
來した宗教が其國の諸神を同化せやうと云ふ時には、本地垂
跡の如き説は非常に巧妙なる方便と思はれ、後世からも其事
を充分研究する價值がある、唯だ偽作と謂つて一概に排斥す
ることは出来ないだらうと思ひます。

其事に聯關して佛教者が老子化胡説に反對に菩薩化身説
を立てまして、儒童菩薩は孔子と化し、迦葉菩薩は老子に化す
と唱へました、是亦佛教が印度から來て、支那の土地に教義を
弘布しやうと云ふのには、對道教徒以外にも頗る巧妙なもの

であると思ひます。

六朝の頃になつて色々な問題が起りましたが、晋の慧遠及鄭道子が神不滅論を書きました、慧遠は晋代有名な僧で、陶淵明と同時の人で白蓮社と云ふものを結んで、當世知名の道俗を集めて隆んに佛教を發揚した、鄭道子は何う云ふ人であるか色々な人に尋ねて見ましたが、まだ能く分らぬ、此神不滅論は今日の術語で云ふと靈魂不滅論である、靈魂と云ふ術語は近頃出來た語である、佛教の書物にも靈魂と云ふ古語はない、其頃靈魂滅盡論を唱へる人があつたから其に反對して神不滅論を出したのである。

六朝の頃、宋の張融は三教に通じて、其同時の人周顒と道佛二教に就て問答をして居ります、張融は三教一致の思想を抱

きしことは彼の臨終の時に左の手に孝經と老子經を把り、右の手に小品法華經を把つて居つたことで分かる、著書には少子あり弘明集にも載せ、玉函山房輯佚書にも收めてある、周顒は三宗論を著したとしてあるも私は未だ見ませぬ。

次に佛教徒に大打撃を與へた人は有名な後魏の太武帝である、其司徒の崔皓、及道士寇謙之は協力して佛教を全滅して道教を興隆せしめた、是亦道佛歴史上の重大事件と思はれる。南齊の顧歡は道教の徒で、佛教と道教とは其體を同うすれど用を異にすと云ふ意見を示し、佛教を中國に行ふは不可なりとして夷夏論(夷は佛の方を指し、夏は中國即ち道教の方を指す)を著してあります。

次に范縝が神滅論を世に發表して因果の説を排撃した、其

時は丁度佛教信者で有名な梁の武帝の時であつて、靈魂滅盡論を發表した時には、世間では非常に反響を來し、武帝も勅を下して之に反對する意見を發表し、又臣下の者に命じて神滅論を攻撃せしめた結果、當代知名の六十三人の攻撃論を得たが餘り効力はなかつたらしい、范縝が神滅論を唱へた主意は、詰り佛教は國の害になる、其害なる佛教の最も大切なる點は靈魂不滅論であるから、神滅論を發表して佛教の害を根本的に除去しやうと云ふに在つた、私は先年「靈魂滅否論」と題して雜誌「丁酉倫理」に投稿して略論して置きました、靈魂滅否と云ふことは昔から今日に到るまで、囂しき問題であります、到底分るべきものではない、孔子家語の中に孔子と子貢との問答があります、孔子は死後の靈魂はあるともいはず無いと

もいはず、極く曖昧な返答をしてある、若し吾が靈魂が滅せずと云ふときは孝子慈孫は身を殺して父母の死に殉するに至るを恐る、若し吾が靈魂が滅すると云へば人の子孫は祖先の祭祀を粗末にし、或は廢するを恐ると仰せられてある、此有無曖昧な孔子の答は實に冷淡なやうであるが、克く考へると非常に熟考の後ちの返答であつたと思ふ、流石は大聖人の返答だけあつて要領を得ないやうで却て要領を得て居る、愈以て聖人の大智には感服します。

梁の武帝の時に陸道士があつた、初め武帝は道教を信じて居つたのであるが、後に道教を嫌つて非常な佛教信者になつた、此頃は丁度達磨が印度から支那へ來た時であつて武帝は之に面謁したと云ふ狀勢である、陸修靜は梁の方

で大に排斥されたから北齊の方へ行つた、其頃は丁度北齊の高祖文帝の時であつた、文帝も陸修靜に説き附けられて、幾分か心が動いて來て道教か佛教かどちらにしようかと迷つた、それで道教と佛教の徒を招いて道佛の優劣を論ぜしめた、其時に道士陸修靜は沙門曇顯の爲めに論破されたる結果、高祖文帝は斷然道教を排斥することに決心したのである。

六朝時代に於ける道教と佛教の爭論の材料は弘明集及び廣弘明集の中に殆んど網羅してあります、此二書に就て考ふるに弘明集は佛教の徒が道教を排斥するを主とし、併せて儒教を抑へやうと云ふ主意が見え、廣弘明集は、幾分か其態度が變つて道教を攻撃することが主となり儒教を壓へると云ふ方は含んで居ない、其故は、其時分は唐の時であるから儒教の

方には五經正義も出來て、勢力が増したから到底攻むることが出來ないと云ふことが分つたから斷念したのである。

梁の武帝の時に陶弘景と云ふ人があつた、此人は道教の徒であるが、儒、佛二教にも通じて居つたらしい、遺著には陶貞白集がある、弘景は山中に隱居してあつたけれども、政治上の才のある人で山中の宰相と稱せられ、何にか政治上の大問題があつたときは、必ず朝廷より使者を以て其の意見を諮詢さるゝ程であつて、非常な物知りで殆ど何んでも知つてゐる、彼は一事知らざるを以て深く耻となすと評せられてある位の人であるから、自ら道教の勢力を強大にしたのである。

又顔之推と云ふ人があつて、顔氏家訓及び顔氏文集三十卷の遺書がある、其顔氏家訓の中に歸心篇と云ふのがあり、其に

は自分は佛教を信じ又た自分の子弟をして深く信ぜしめると云ふ理由を述べてある、此人は儒者にして佛教を信じた者であります。

次に後周の武帝も亦有名なる佛教破滅の策を斷行した人である、其佛教全滅を行ふ前には屢三教の徒を召して、其の優劣を論ぜしめた、其時に甄鸞と云ふ人がありました、武帝は之に命じて佛道の二教を論ぜしめた、是に於て甄鸞は笑道論即ち道教を笑ふ論と云ふ一書を著した、廣弘明集の中にも其大略を載せてある、以上述べ來れる事柄は魏書の釋老志にも大體の論述があつて參考になります。

其後ち隋の李士謙は三教一致の論者で、佛は日なり、道は月なり、儒は五星なりといふ態度で説を立て居ります。

隋に王通即ち文中子と云ふ有名な學者があつた、著書も矢張り文中子と題してあります、三教に就て極て簡單な批評を試み、佛は西方の聖人なりと云ふ意見を發表してある、但だ其教は中國に施すべからずと云ひ又た三教を論じて三教是に於てか一なりと言てある、極く穩かに唯だ社會に佛教を施す上に就て利害如何と云ふ點のみから論及したものと思はれます。

唐の世になりましたは儒道佛三教ともに盛にして、孰れを排斥することもないが、さうなると三教どれを一番尊ぶかと云ふ議論が起つた、唐が李氏である所から李耳てふ老子を其遠祖なりと唱へ老子を一番にすることに決せんとしたが、佛敎者の方でナカ／＼其説を承知しないで、屢々論争したけれ

ども大體の方針は矢張り老子を一番にして孔子を其次に、佛教は外國から來たものであるから最も末に置くことになつたけれども、久しき間には色々議論があつたから幾らか變更しました、唐の宗密と云ふ人が原人論を著してあるが、韓退之にも原人と云ふ一篇がある、普通には韓退之の議論が先きに起つたから夫に對して宗密が原人論を著したとしてありますけれども、韓退之の原人と云ふのは至つて簡單である、さうして佛教を誹つた譯でもないから宗密が原人論を著はすの原因となつたものは其以外にあつた、即ち當時の儒者が佛教を攻撃したから其に對する主意であつたらしく思はれる、唐の太宗の時に道教の熱心者に傅奕と云ふ人があつて佛教を誹り十一箇條の文を作て上つて佛教を亡ぼすことを謀つた

のである、傳奕の論は其當時の社會に非常な影響を與へたものと見え、之に對する駁論者が幾人も出てある、猶唐代の事は集古今佛道論衡に收めてあります。

白樂天の三教論衡と云ふのがありますが、其内容は極く簡單なもので、且つ雜誌「藝文」の第一年第六卷に私が簡単に解釋して置きましたから御覽を願ひたい。

韓退之は唐代に於ける最も熱心なる佛教攻撃論者であつて佛骨を諫むる表もある、退之は獻身的に佛教攻撃を行つた人である、又た道教に對しては關服食説と云ふのがある、是は仙藥を服することが身を誤れる本となれることを述べて、道教の仙術を攻撃したのである。

唐の武宗皇帝は非常に極端に佛教排斥を試み、道教を深く

信仰した、四萬餘の寺院を破壊し、二十六萬餘の僧侶を還俗せしめ非常に果斷の處置を行つた人であります。

五代の時になりました譚子化書と云ふのがある、譚峭は道佛二教の調和を唱へたが、其主とする所は道教に在つた。

又た其頃に陳搏と云ふ人があります、道教を主とすれども三教一致論者で百歳以上の長壽を保つたらしく學徳共に優れて非常に尊敬されました、唯だ三教調和の論者としてのみならず支那の哲學、特に宋學には餘程影響して居るのである、道教の歴史上にも特筆すべき偉人と思はれる。

次に宋代の蘇東坡の東坡禪喜集と云ふ書籍がありますが、之を見ますと東坡が如何に禪理に達して居たかと云ふことが分る、我々が平生東坡を知つて居るのは文豪又は政治家と

して知つて居るのであるけれども、東坡が如何に佛教に造詣せしかは廣く知られないが此の東坡禪喜集には禪學的方面の消息を具に示してあります、東坡は儒者として佛を喜んだ方の人であります、其弟蘇轍も矢張り佛教を味ひ老子を深く研究し老子の註を著はし儒佛老一致の意見を洩してある程であります、宋の張無盡居士商英が護法論を著はした、張無盡は政治家として宰相迄になつた人で非常に高邁な人であつた、其議論も堂々たるものである、其一節に「孔子を大にするものは莊周に如くはなく、孔子を小にするものは孔安國に如くはなし」と云ふことを云つて居る、都て斯かる論法でナカナカ奇抜な議論をして居ります、無盡も始めは儒者であつたが或る寺院に行つて、大藏經の非常に莊嚴鄭重に整頓されてある

のを見て、我が孔子の遺經は佛教の遺經に及ばざるかと云ふことを歎き、さうして非常に發憤して無佛論を草せむとて、苦辛中其妻の爲に佛なくんば何ぞ無佛論を作らん寧ろ有佛論を草するに若かずと説かれ、沈思默考の後遂に深く佛書を見て佛教熱信家となつた、畢竟大なる敵が變して大なる味方となつたのであるから佛教の爲に好都合であり、元來豪邁な人であるから歸佛後の活動も目覺ましかつたのである

それから宋の胡致堂の崇正辨と云ふ書があります、純儒の態度を以て精密に佛教の妄誕な説を駁したのであります、書中には始に佛教者の説を擧げて、其次に自分の駁論を擧げ、一箇條毎に駁論を擧げて居る、儒教者として佛教の攻撃をした書物の中では致堂の崇正辨が最も精巧に出來て居るやうに

思ふ、讀史管見も此人の著である、隨分廣く研究した人で、特に佛教も深く研究した人と見えます。

次に三教平心論と云ふ書がある、宋の學士劉靜齋の著である、該書は餘程公平に書名の示す如く三教を公論し先づ私心と以て論ずべからず、憎愛の念を以て論ずべからずと自ら誠め雅懷を以て論究してあるが、矢張結局は佛教を重く見て之を主とせしやうである、我が邦人で、此三教平心論の註釋を書いたものがある、三教平心論事義便蒙と名け、寫本です、三教平心論に就ての難解の字句及故事などを叮嚀親切に示してあります、版本はまだ見ませぬ。

次に鳴道集説と云ふ書物がありますが、金の人、李純甫の著である、佛教信者で、儒教の先哲の語を擧げ、之を佛教的意見を

以て駁したものである、其前に諸儒鳴道集と云ふものがある。鳴道集の中には宋の道學者の説を列舉して、自分の意見と合はぬものを駁してある、胡致堂の崇正辨とは主意相反したもので、儒者の語を擧げて逐一攻撃を加へたのである、儒佛の論争を見るに足る。

次に異端辨正と云ふ書がある、上中下三卷で明の詹陵の著である、儒者として佛老を排斥したものであります、此書に似たる著は排釋錄で我邦佐藤直方が古來儒學者の佛教攻撃の爲に發せる説を集めたものである。

明の世宗は非常な道教信者で、佛教の全滅を謀つた人である、世宗は在位四十五年の長に亘り其の間に百方佛教の全滅を謀つたのであつたから佛教に對する打撃は非常なもので

ありますが、其等は歴史でありますから其中の或一部分が
要なのであります、其外に色々の著書及書名の分つて居るも
のがありますが、私の見るに至らないのも多くありますから、
他日の研究に譲ります、(完)

(明治四十四年四月三十日講演)

あつた、此事は明史及明朝記事本末等に詳しく記してある、道佛歴史上重大な事件であつた。

次に佛教金湯録といふものがあります、明末の人屠隆の著である、佛教の熱心な信仰者で、主もに宋儒が佛法を譏つた語を列擧して、之を攻撃し、其終りに佛法の經論の中の語を擧げて、色々問答して佛教を明かにすることを計つたのである。

最後に居士分燈録と云ふ本があります、明末の朱時恩の著で、唐宋間の儒者で禪學を修めた人のことを記して題名の如き書を作つたのであるが、亦參考すべきものであります。

以上にて私が持參した資料は、了りでありませんが、其外に三教の交渉の跡を探ぐる書物は色々あつて、佛祖統記、四朝高祖傳、佛法金湯録、釋氏稽古略、佛祖歷代通載と云ふ種類の書物も